

法金剛院『古瓦譜』の調査

平城宮跡発掘調査部

京都市右京区花園扇野町所在法金剛院住職川井戒本氏の御好意により、同院所蔵の古瓦拓影集『古瓦譜』を使用、マイクロフィルム化すると同時に各種の調査をおこなった。詳しい報告は後刻出版の予定であるが、ここで概要を紹介しておきたい。

『古瓦譜』は8帖からなり、その製作は文政10年から天保3年にかかる。各帖は縦32cm、横24cm内外の和装本で、拓は油墨でないため全体にやや不鮮明である。各帖の表題と製作年、および収録された拓影数は以下のとおりであるが、これらを収めた箱書きに「和漢古瓦譜八帖法金剛院」とあり、総称して『古瓦譜』と呼ぶ所以はここにある。

a.	「宮城神社公家弟宅古瓦集 諸寺伽藍堂譜坊院古瓦集」	所持一 文政十亥年春ヨリ始	101枚
b.	「宮城神社公家弟宅古瓦集 諸寺伽藍堂□院古瓦集 (坊)	他所蔵」(文政十年夏六月)	86枚
c.	「南都之分 倭州諸寺伽藍堂塔譜古瓦集」	所持二 文政十亥年分	86枚
d.	「古瓦集」	所持分三 文政十亥□分 (四方)	91枚
e.	「古瓦譜」	所持之分□ 文政十一年亥子	149枚
f.	「古瓦譜」	他家蔵 文政十二丑蔵二月ヨリ	122枚
g.	「古瓦譜 壹」(文政十三年寅九月)		序文+41枚
h.	「古瓦集」 ^五	所持分 文政寅年 并天保元年 二卯年 同三辰年	51枚

上記の拓影数を合計すると727枚となるが、実際にはbが2枚、cが5枚、gが58枚多く、総数795枚である。うちわけは軒瓦676、平瓦33、瓦経14、文字瓦28、鬼瓦1、塼佛1、その他42である。軒瓦のなかには同一物の別拓が含まれており(三重複するものもある)、実数は613となる(軟丸瓦347+軒平瓦266)。

ほとんどの拓には註記が付されており、出土地ないしは採集地、所持者などが判明し、出土地の是非についても今日の我々の知見と矛盾するところごく僅かである。軒瓦拓を出土地により大別すると、大和297、山城263、近江13、播磨4、河内4などで北は武蔵、南は太宰府におよぶ。出土地点別によると平安宮66、唐招提寺54、法金剛院(大安寺を含む)45、平安宮42が多い。gには「古瓦帳序」と題した大江廣海の手になる序文が付されているが、採拓から集録に至る経過については全く触れていない。川井住職によると『古瓦藍』の作者は宝静菴淳という。これを裏づけるものとしてgの末尾の「宝静之印」「玉憫」印を挙げ得る。菴淳は唐招提寺の僧で、のち壬生寺を経て法金剛院に移り、ここで没した。三ヶ寺関係の拓が多いのも、この故であろう。

(山本 忠尚)